

近世初頭における日蓮宗の山家・山外論争

小 野 文 瑠

中世から近世への日本の時代転換に、日蓮宗教団も大きな変貌を遂げている。祖師以来、国家諫曉・仏国土顕現という政治批判の面を濃厚にもつた行法理念を掲げてきた教団は、当然その時代と積極的な交渉を有し、常に時代社会と緊張関係を維持してきた。そのため、時代の動向に教団そのものが大きな影響を受けることなのである。

叡山を中心とする他宗派による京都二十一本山壊滅という一五三六年の天文法難以後、関西日蓮教団には、日蓮宗の宗義を固執する折伏一辺倒の在り方に修正を加える動きが顕著となり、その方向は、日蓮の教学の基盤となつた天台教学を教団の学問の中心に据えることによつて他宗との融和を試みんとした。ただし、天台教学といつても日本天台は、祖師が日本天台から出て、日本天台を超克する形で独立した以上、常に対立せざるを得ず、すでにその為、叡山から徹底的な弾圧を被つたところでもあり、教団が志向したのは、中世の日本天台の教学摂取とは全く異つた、原始天台への復帰にあつ

た。すなわち、天台・妙楽の三大部研究を主眼とする学風である。この傾向は織田信長の策謀による安土法難を機に、強大な統一政権の支配が進行する中では中世的な伝道は許されなくなつたと認識した関西教団の指導者達によつて一層拍車がかけられ、日蓮の教学をひとまずおいて、天台教学の実相論・観心論を学ぶことによつて、三諦円融、絶対開会の摂受思想を打ち出す軌道修正が進められたのである。^①ところがこの関西日蓮教団の転換に対して、統一支配の時代進展から離れた関東はまだ中世の教風そのままが継承され、宗義重視の折伏思想が守られていた。この関東教団と関西教団の姿勢の相違が、豊臣秀吉・徳川家康の宗教統制によつて惹起した日蓮宗の不受不施事件^②となつて表面化したのである。不受不施事件を契機に、家康という権力者を背景にして身延山を押え関東へ進出した日重・日乾・日遠の関西の指導者達は、安土法難・不受不施事件を教訓に、支配政権の中で教団を維持形成せんと、寛容で柔軟な、時代に適応した摂受教学を先に述

べた天台学の絶対円融論を基礎に樹立し、関東教団と対峙したが、この身延日遠系（日遠とその弟子達が受不施一致派という近世日蓮教団の中心となつた）の教学者と、受不施派の祖である妙覚寺日奥を支持して伝統宗学を鼓吹した池上日樹系の関東教学者は、不受不施論争のさなか、天台学に対してもその見方を異にし、両者天台学の解釈について激しい論難の応酬をしているのである。

近世初頭の檀林の勃興は、そこでの習学内容が天台学にあつたため、関西・関東を問わず台学研究に精力が費されていった。その結果は三大部の階梯書の研究が主流となつて趙宋天台の研究が盛行したのである。当然そこに支那天台の山家・山外論争にふれざるを得なくなつた。日遠系は四明知礼の山家正統を退けて、智円・仁岳・從義の山外派の説をとつた。日遠は『色心不二門義』に山家・山外の説を比較して終始山外派の説を正として論述している。これに對して、池上日樹は『留意要』に、中山日賢は『不二門義釈答』に、日遠は四明を曲解してことさらその觀心説を誹謗して山家を貶めているのであり、四明教学こそ天台の正統であることは論をまたないと強調し、日遠の山外正統に反駁するのである。この両者の論争は、一六三〇年、不受不施派の禁断によつて池上日樹以下関東の教学者が流罪に処せられたことによつて一応終息するのであるが、この近世初頭の日蓮宗の天台学論争は日

蓮宗教学史の上に特異な一面を有している。

この論争は複雑な要素がからみあつていたので、一概に両者を判定するのは困難であり、その真意を解明するのも、單純な視点からでは見誤まる危険がある。そこでまずその論争の特徴を整理すると、

一、日蓮宗の天台学傾倒の過程から起つた、日蓮宗の支那天台正統論争という二重三重の屈折した構造を持つていふこと。

二、不受不施論争という教団存亡の思想闘争が背景にあること。

三、強力な国家統一の時代に教団再形成を余儀なくされたその端初思想論争であつて、時に觀心論が中心になつたことが、その後の日蓮宗教学に大きな影響を与えたということ。

一の支那天台正統論争というのは、日本天台宗の妙立慈山・靈空光謙の四明天台復帰の改革運動より百年も早く、日蓮宗は日本中古天台の口伝法門の弊を一掃して天台の正統に戻つていた。しかし、ここに大きな問題がある。天台の正統が日蓮の正統たりうるかという課題である。日蓮宗の教学を強引に天台学の内に戻した関西の日重門下の真意を推測すれば、時代の趨勢をおもんばかつた余儀ない面が窺われ、決して台・当の異目を無視したわけではないということが察せら

れる。ただ不受不施の日奥が日蓮の大義名分を立てて批判を展開したために、表面的には円体無殊の台家の立場に後退せざるを得ず、日蓮信仰は内省化してしまつたわけである。しかし、その内に籠つた日蓮信仰は、消極的ではありながら、天台の正統に溺れず日蓮の立場を明確にしておかなければならないという反省を常に持っていたと思われる。日蓮を始めとするその一派がわざわざ四明天台を捨てて異端とされる山外派をとつた理由がここにあると思う。すなわち、支那天台正統の四明の教学からでは日蓮の本門の事の一念三千の説明は困難をきたし、天台の止観と日蓮の観心の相違がいまいになつてしまう。むしろ本覺門的な山外派の説の方が日蓮の教義に結びつけやすいと捉えた、ここに山外正統の論が起つた所以があると考えられるのである。

二の、背景としての不受不施事件からみると、一つの大きな疑問が残る。それは何故日蓮の宗義を重んじた不受不施派の学匠が山家四明天台正統に固執し、その論の展開に日蓮の立場が全く見受けられないのか、ということである。この疑問には不受不施という日蓮教団独特の法門の思想的根拠を探ることによつて解答が得られるのではないかと考えられる。受不施の身延日遠側は山外の観心思想をかりて自らの絶対円融の不二門に立脚した日蓮宗の修正教義を論証しようとした。つまり、謗法供養を受けるといふ弁明に、絶対開会の妙

法不二論を展開するのであるが、そこには己心の妙法の理に於てはすべて平等であるという理總事別的な立場があるのである。山外派の真心観、特に智円・仁岳・從義の「妄に即する真」といふ観心論は受不施側の教理論を普遍化する際非常に便宜であると見たと考えられる。不受不施派は、受不施側がとつた山外正統論の底にこの意図を汲みとつたと思う。もともと不受不施というのは、絶対円融の理によつて善惡不二を論ずるのを排して、相對差別の事において善惡・邪正を峻別し、謗法の罪を折伏する相待妙立宗にあるのである。日奥は『守護正義論』の中で、「夫れ理性不二門の前には万法一如善惡不二なりと雖も事相而二門の時は法に樞実を立て理に龜妙を分つ、故に凡聖位を異にし、邪正混することなし。汝不二の一边を以て妄りに邪難を加ふ、学道の恥辱に非ずや」と理体論を否定し、現実の人間における不信・謗法を責めるのである。四明知礼が、華嚴の影響を受けて全くの唯心論に墮した山外派を攻撃したその根拠には、敵對種の発掘がある。即ち性惡説がこれである。観心論でいえば妄心觀にその特徴がある。受不施側が四明を批判して山外の観心をとつた時、不受不施側が即座に四明を擁護してその妄心觀をとり鋭く對峙したのは、事相の上で不信・謗法者を峻拒する不受不施思想の理論的基盤を知礼の嚴格主義に見出していたからに相違ない。「而不二」に立つか、「不二而二」に依るか、即

ち本宗における山家・山外論争は、そのまま受・不受の根本的思想対立と見られるのである。

三のこの論争の日蓮宗教学における影響の点からみると、以後の日蓮宗教学は天台心酔時代を迎える。不受不施派の禁圧によって再編成された教団は檀林の全盛時代となり、その檀林の天台学が一世を風靡し、日蓮宗学は台学の余暇に学ばれるような状態になった。そして天台の正統論争は遠師門下が主流を占めたにも関わらず、逆に山家四明正統説が大勢となるのである。それは不受不施事件以後、近世の日蓮宗の天台学が、天台学のための天台学となつたことを示唆している。つまり、学問として純粹に天台の正統を求むれば四明天台に至ることは当然なのである。そこでは日蓮の教義を四明天台を通して取捨するというような倒錯した風潮まで生じさせた。この傾向を生みだした源流を求むれば、やはりこの近世初頭の論争が挙げられる。この山家・山外論争は表面的には全くの天台の教義論争であり、両者とも、むしろ天台学の枠内に入ることをめざして、意識的に日蓮の世界に触れることを避けていた。この論争が起点となつて台学心酔の近世の義科論題教学に発展したのも当然であつたのである。そして近世後期の宗学復興の時にはすでに四明教学は日蓮教学を導いたものとして位置づけられ、宗学復興は四明天台からの脱皮という形をとらざるを得ず、復興された宗学の中心には天

台学の色濃い影が漂っているのである。¹³⁾ また、この山家・山外論争の中心となつたのが観心論で、以後、観心論は近世日蓮教学の命題となり、後期にいたつて復興された宗学は、興の師と仰がれる日遠の台学ずわりの摂受主義を基調とした観心教学の面が継承展開されたとも見られるのである。

- 1 執行海秀『日蓮宗教学史』参照。
- 2 宮崎英修『不受不施派の源流と展開』に詳述。
- 3 代表的なものに日乾の『宗門綱格』がある。
- 4 「凡そ諸の文義の大体仁岳従義を正を得たりと謂ふべし」二五丁。
- 5 「(日遠)四明を斥ひ多く浄覚を用い始従義に拠る。而に皆三家の意を失ひ僻に両家の義を評す」留意要中 一丁。
- 6 日樹・日賢に対して日遠の弟子日耀・日勇が『破答記』『破留意要』等で反駁。
- 7 この論争については望月敏厚『本宗先師の見たる山家・山外』(大崎学報所収)がある。尚拙稿「近世日蓮宗教学に於ける観心思想の展開」(日教研紀要3号)で小考した。
- 8 『色心不二門義』一七丁。
- 9 『万代亀鏡録』P九七。
- 10 『不二門義釈答』三八丁。
- 11 『峨眉集』P五六四。
- 12 近世日蓮宗教学の大成者日輝の宗学がこれである。

(立正大学講師)